

<日本認知症ケア学会 2013年全国大会 石崎賞>

ミッケルアートによる脳機能活性の効果

～ミッケルアートを活用した認知症ケア検証のための基礎研究～

発表者 橋口論

静岡大学発ベンチャー企業・株式会社スプレーアートイグジン

富谷理子、大河原知嘉子 / 東京医科歯科大学医学部保健衛生学科

大黒理恵、齋藤やよい / 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

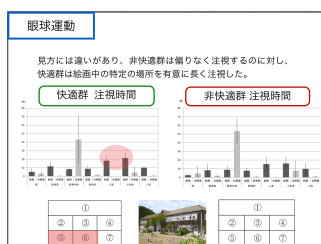
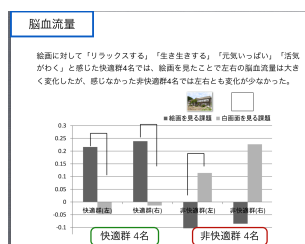
【目的】 絵画（ミッケルアート）を用いた認知症ケアの効果検証の基礎研究として、絵画による生理的・心理的影響を脳血流量、眼球運動、および主観的評価から明らかにする。

【方法】 健康な成人女性8名を対象に、色やモチーフが多くストーリー性のある小学校校舎の風景を描いたミッケルアート（スプレーアートEXIN製）を見てもらい、脳機能活性の変化を実験的に調査した。実験は温湿度、照度を調整した同一環境で行い、測定は脳血流量（頭部近赤外光計測装置、日立HOT121B）、眼球運動（アイマークレコーダー、NacEMR-9）により行った。主観的評価は絵画への嗜好、見て感じたこと、覚えていることなどの自由記載内容分析により行った。

【倫理的配慮】 公募に応じた対象者に、研究方法、個人情報・秘密保持等の説明を行い、本人の自由意思により参加してもらった。方法はすべて非侵襲的であり、申し出によりいつでも中断、棄権できることを説明した。

【結果】 絵画に対して「リラックスする」「生き生きする」「元気いっぱい」「活気がわく」と感じた快適群4名では、絵画を見たことで左脳血流量は0.22mM-mm、右0.24 mM-mm変化したが、感じなかった非快適群4名では左-0.1 mM-mm 0、左-0.09 mM-mmであった。眼球運動は、0.2秒以上の注視の総数、および回数に違いはなかったが見方には違いがあり、非快適群は偏りなく注視するのに対し、快適群は絵画中の特定の場所を有意に長く注視した。また、自由記載の文字数・項目数も快適群に多かった。

【考察】 絵画を快いと感じて注視し、何かを想起・記憶することを通して、脳血流量は増加し、語りの文字数を増加させる効果があることが明らかとなった。意識的に対象の好む情報を取り入れた絵画を提供し、効果的に注視を誘導ことが脳機能活性につながる事が示唆された。



主観的評価

自由記載の文字数・項目数も快適群に多かった

快適群	非快適群
自由記載の文字数	自由記載の文字数
自由記載の項目数	自由記載の項目数